13・14世紀アルスターのドヴナル・オニールの戦略

田中　美穂

一般科文系

13世紀後半から14世紀初めにかけて，ドヴナル・オニールは，アイルランド北部アルスター地方の中心部ティローン王国の王であった．当時，アルスター地方で最も有力な王であったドヴナルは，スコットランド王の弟エドワード・ブルースによるアイルランド侵攻（1315～18年）を支援したことでも知られる．ドヴナルは，スコットランド王家のブルース兄弟と同盟関係を結び，自身の敵と戦った．

本稿では，13・14世紀に生きたドヴナルの生涯や彼の戦略を通じて，現地のアイルランド（＝ゲール）人がイングランド人勢力といかに戦ったのかについて，その一端を明らかにしたい．

キーワード：13・14世紀アイルランド史，ドヴナル・オニール，アルスター地方

はじめに

本稿で取り上げるドヴナル・オニールは，13世紀に唯一「アイルランド上王」(「何人もいる現地のアイルランド人の王の中で最有力の王」くらいの意味で王位は臨時）と称されたブリアン・オニールの息子で[1)], 1325年まで生きた．

13世紀後半から14世紀初めにかけて，生涯で3度，ティローン王となり，エドワード・ブルース（1318年没）によるアイルランド侵攻という大きな出来事とも深く関わった．そればかりか，1317年にドヴナル自身が執筆した『抗議書（レモンストランス)』で，エドワード・ブルースを「アイルランド上王」として承認までしている．

13世紀後半以降，14世紀になっても，アイルランド各地では，現地のアイルランド人と，12世紀後半以降にアイルランドに侵入したイングランド人との争いが続いていた．現地のアイルランド人の中には，イングランド勢力と手を結んで，同胞のアイルランド人の王や王族と戦う者もいた．

この頃のアルスター地方では，イングランド人が，ノース海峡に面した現在のアントリム州，ダウン州の一部を占拠していたが，それ以外の地域は，オニールをはじめとする現地のアイルランド人が支配する地域となっていた．他地方と比べて，アルスター地方では，アイルランド人勢力が占める割合が圧倒的に大きかった．当時は，イングランド王のアイルランドに対する関心も低く，アイルランドは軍の兵士や食糧の供給地として利用されるくらいであった．ドヴナルら現地の王は，イングランド王が任命したアルスター伯ド・バーグの配下にあったものの，先祖から受け継いだ自分たちの領地を実質自分たちで治めていた[2)]．

そんな中，ドヴナル・オニールについては，海を隔てたスコットランドとの関係が重要なものとして特徴づけられよう．本稿では，ティローン王ドヴナル・オニールの生涯，ドヴナルとエドワード・ブルースやギャロウグラス（スコットランド出身のゲール系兵士）との同盟，ドヴナル・オニールの戦略について論じ，13・14世紀におけるアルスター地方の勢力争いの一様相を明らかにしたい．

１．ティローン王ドヴナル・オニール

ドヴナル・オニールは，父であり，「アイルランド上王」の称号を年代記で与えられたブリアン・オニールが1260年に戦死したとき，まだ幼かったと推定される[3)]．1325年に領地内のクラノーグ（人工の島）で死去したとの年代記の記録から[4)]，父と異なり，ドヴナルは，寿命を全うしたものと考えられる．

父ブリアンの死後，ティローンの王位は，ブリアンを倒したエイド・ブデ・オニール（ブリアンのいとこの子）に渡った。エイド・ブデが1283年に戦死すると，ドヴナルがティローン王の地位を獲得する．しかし，3年後の1286年に，アルスター伯リチャード・ド・バーグ（1326年没）により退位させられた．父ブリアンも，イングランド王から派遣された時のアイルランド総督らと戦っていたが，息子のドヴナルも，アルスター伯のド・バーグと戦った．

ブリアンとドヴナル親子は，このようにアルスターにいたイングランド人勢力と戦ったが，現地のアイルランド人の王や王族の中には，イングランド側と手を結ぶ者もいた．エイド・ブデも，その兄弟のニアル・クーラーナハ（1291年没）も，エイド・ブデの子のブリアン（1296年没）も，リチャード・ド・バーグと同盟し，ド・バーグによってテ

ィローン王位を認められている．

ドヴナルが，ティローン王であった期間は，1283～86年，1290～91年頃，1296年以降であったと推定される．

上述のように1286年にドヴナルがリチャード・ド・バーグにより退位させられた後，ティローン王となったのはニアル・クーラーナハであった．ドヴナルは，1290年にこのニアルを退位させてティローン王に返り咲いたと見られるが，翌1291年に，ド・バーグによって再びニアルに王位が戻された．これに対し，同年，ドヴナルがニアルを殺害すると，ド・バーグは，今度はエイド・ブデの子のブリアンにティローン王位を与えるのである．こうしてドヴナルが2回目にティローン王となった期間は1年ほどで終わってしまう．1296年に，ドヴナルは，ティローン王ブリアンをクリーヴ（Creeve）の戦いで殺害し，自身3度目のティローン王位を獲得した．その後は，ブルースのアイルランド侵攻が失敗に終わった翌年の1319年に，エイド・ブデの孫でブリアンの子のヘンリー・オニール（1347年没）らによって，一時的にティローンから追放されたものの，ティローンに戻り，王としての権力も回復し，1325年に死去するまでティローン王の地位にあった．

以上，ティローン王国の王位は，13世紀後半から14世紀初めにかけて，アイルランドで，少なくともアルスター地方では最も有力な現地勢力であるオニール家によって継承されてきた．しかし，その王位は，直系の血筋によってではなく，ドヴナルの父であるブリアンの家系と，その敵対者エイド・ブデの家系によって交互に継承されていた．そして後者のエイド・ブデ，ニアル・クーラーナハ，エイド・ブデの子ブリアンの家系は，ずっとイングランド勢力のド・バーグ家と結びついてきたのである．

エイド・ブデ，ニアル・クーラーナハとドヴナルは又従兄弟の関係であった．ティローンの王位継承は，このような親族同士の争いに，アルスター伯ド・バーグ家や近隣の他のアイルランド人の王や王族など外部の力が加わって，左右されるものであった．

そして，イングランド人勢力の介入によって，ティローン王の地位を何度も奪われたドヴナル・オニールは，スコットランド王家と同盟関係を結ぶことになるのである．

２．エドワード・ブルースの侵攻と『抗議書』

ドヴナル・オニールの生涯の中で，中世アイルランド史上最も重要な出来事の一つと言えば，エドワード・ブルースのアイルランド侵攻である．ドヴナルはこのブルースと強い同盟関係を結び，『抗議書』の中でブルースこそが「アイルランド上王」であると主張するのである．

エドワード・ブルースの兄は，スコットランド王ロバート・ブルース／ロバート1世（在位1306～29年）である．ロバートは，1314年のバノックバーンの戦いでイングランド軍に勝利し，1297年からイングランド軍との間で戦われた（第一次）スコットランド独立戦争で，スコットランドを最終的に勝利に導いた人物である．

ロバートは，1302年に2番目の妻として，アルスター伯リチャード・ド・バーグの娘を迎えた．彼女との間に1324年に生まれた息子が，父ロバートの死後にデイヴィッド2世（在位1329～71年）となり，わずか5歳でスコットランド王位を継承することになる．

一方，ロバート・ブルースはドヴナル・オニールと同盟関係にあった．1314年のバノックバーンの戦い後，ドヴナルが，ロバートに対してアイルランドに軍を派遣するよう後押ししたと考える研究者もいる[5)]．いずれにせよ，ロバートが，翌年に，自身の弟のキャリック伯エドワード・ブルースをアルスターに派遣したことは事実である．

こうして1315年5月25日（26日の説もある）に，エドワード・ブルース率いるスコットランドの軍がラーン（アントリム州の東海岸）に上陸し，約3年半にわたるアイルランド侵攻が始まることになった[6)]．

ドヴナルをはじめとするアルスター地方の有力な王や王族は，すぐさまエドワード・ブルースの軍に加わった．ブルースたちは，アントリム州のキャリックファーガスを占拠し，自分たちの拠点とした．また，レンスター地方にも侵入し，イングランド人入植者の艦隊を破り，ラウス州のダンドークを占拠した．これらに対して，アルスター伯リチャード・ド・バーグは軍を派遣し，敵対するエドワード・ブルースらの軍をレンスターからアルスターに退却させた．しかし，9月10日のアントリム州のコナー（Connor）での戦いで，逆にブルースらの軍に敗れる．ド・バーグはコナハト地方に敗走することとなった．

1315年12月初めまでに，ミーズにいたブルースは，トリム領主ロジャー・モーティマーに率いられたイングランド側の軍を破った．このロジャー・モーティマーは，翌1316年11月にイングランド王エドワード2世（在位1307～27年）により，アイルランド総督に任命され，エドワード・ブルース率いる軍の討伐を命じられることになる．

ドヴナル・オニールは，1316年初めのエドワード・ブルースのレンスター遠征にも同行した．一時は成功を収めたものの．イングランド軍の追撃もあり，南部を征服することは出来なかった．同年5月に，エドワード・ブルースは，ドヴナルから彼の父が持っていた「アイルランド上王」の地位を与えられ，「アイルランド上王」としてダンドーク近くのフォーガート（Faughart）で即位した．

翌1317年初めには，スコットランド王である兄ロバート・ブルースがギャロウグラスの援軍と共に合流した．ブルース兄弟率いる軍は，2月にミーズを荒らし，南部のレンスターとマンスターに遠征するが，またしても失敗に終わった．兄ロバートは，5月に弟を残してスコットランドに帰ってしまった．エドワード・ブルースは，アルスターに退却し，1年半ほどそこにとどまった後，1318年10月にまた南下しようとした．しかし，イングランド軍の攻撃を

受け，10月14日に，自身が「アイルランド上王」として即位したフォーガートで，エドワード・ブルースは戦死した．ドヴナル・オニールは敗者となった．

こうして，1315年から1318年まで毎年，計4回にわたって続いたエドワード・ブルースによるアイルランド侵攻は，失敗に終わった．結局、彼とその軍が，アルスター地方以外の地域を征服することはなかった．

ドヴナル・オニールが，教皇ヨハネス22世に宛てて，『抗議書（レモンストランス）』を書いたのは，1317年の夏であった[7]．この文書では，アイルランドにおけるイングランド人による残忍な支配を非難し，父から譲り受けて自身が持つはずの「アイルランド上王」としての地位を，エドワード・ブルースに譲渡することが主張されている．

この頃は，南部への3回目の遠征が失敗し，スコットランド王ロバートも去り，ドヴナルが支持するエドワード・ブルース陣営にとって非常に厳しい時期であった．

ドヴナル・オニールは，なぜエドワード・ブルースによるアイルランド侵攻を支援し，自身もブルース軍に加わったのか，また彼はなぜ『抗議書』を執筆し，教皇に送ったのか，これらについて以下，考えてみたい．

３．ドヴナル・オニールの戦略

ロバート・ブルースは，スコットランド王に即位して間もない頃に苦境に立たされ，1306年秋から翌年2月まで，一時期スコットランド以外の地で過ごした．アルスター地方のラスリン島に避難していた可能性も指摘されている．いずれにせよ，1306年に避難場所から，ロバートはアイルランド全ての王・聖職者・住民に宛てた書簡を執筆し，アイルランド本土に使節を派遣して届けさせた．その書簡でロバート・ブルースは，スコットランド人とアイルランド人を，祖先・言語・慣習を同じくする「同胞（同じネイション）」としてとらえている[8]．

この書簡はアイルランドからの援軍を求めて出されたものである．すでに多くの研究者によって指摘されているが，この頃，すなわち1306年にドヴナル・オニールとロバート・ブルースが同盟を結んだと考えられる．ドヴナルらアルスター地方の有力なアイルランド人領主は，ロバート・ブルースの援軍派遣要請に応えた可能性もある．ブルース兄弟は，母方からアイルランド（＝ゲール）系の血を引いており，ロバートの「ゲール同盟」を求める書簡は，自らの出自や，アイルランド人とスコットランド人のゲール系としての結びつきを意識したものであった[9]．

一方，ドヴナル・オニールが1317年に執筆した『抗議書』でも，両者のゲール系としての結びつきが強調されている．ドヴナルは，最初の方で自身が，聖パトリックの時代（5世紀）から続く正統なイー・ネール（＝オニール）一族の子孫であることを述べる．そして，最後の方で，「ロバートの弟であるキャリック伯エドワード・ブルース」を支援するためにアイルランドに招き，エドワードを自分たちの王国の王・領主とすることを宣言する．この『抗議書』では，スコットランド王の血統がアイルランドの高貴な祖先に由来することや，スコットランドではアイルランドの言語や慣習が保持されていることに言及されている[10]．

つまり，1306年のロバート・ブルースがドヴナル・オニールらアイルランドの王たちに宛てて書いた書簡と，1317年にドヴナル・オニールがエドワード・ブルースをアイルランド上王にするために書いた『抗議書』，これら両方で，アイルランドとスコットランドが祖先・言語・慣習を同じくすることに言及されているのである．前者は，窮地に陥ったロバートがアイルランドに援軍を求める目的で書き，後者は，ドヴナルが，イングランド人による不当な圧政を終わらせるためにスコットランド王の弟をアイルランド上王にすることを意図して書いたものである．ドヴナルは，自身が『抗議書』を執筆する際，先のロバートの書簡を参考にしたのかもしれない．

13世紀以降，アルスターやコナハトの王たちは，スコットランドのヘブリディーズ諸島の王や王族と軍事や婚姻関係による同盟を結んできた．スコットランドのゲール系傭兵であるギャロウグラスも，最初にこれらの地域に派遣された．ドヴナルも，自身が1291年にティローン王に返り咲く際の戦いで，ギャロウグラスを利用している[11]．

『抗議書』の訴えを教皇が聞き入れることはなかった．また，エドワード・ブルースは1318年に戦死した．それ以降，スコットランド王家の者に「アイルランド上王」の位が与えられることはなかった．それどころか，「アイルランド上王」と見なされた王は，エドワード・ブルースが最後となった．

ドヴナル・オニールは，父である「アイルランド上王」ブリアン・オニールから自身が譲り受けるはずだった王位を，『抗議書』でエドワード・ブルースに譲ると主張する．しかし，「イー・ネール」と呼ばれていた時代の同王家出身の「アイルランド上王」や「アイルランド王」に比べて，また父ブリアン・オニールに比べても，エドワード・ブルースの「アイルランド上王」としての権威はおぼつかない．彼の即位は侵略戦争最中の出来事であり，結局，彼の支持者は，アルスターを中心とする一部の勢力に過ぎなかった．

ドヴナル自身も，父ブリアンには到底かなわなかった．ブリアンは，アイルランドで，アルスターのオニール以外の名門一族であるコナハトのオコナー，マンスターのオブライエンからも認められて「アイルランド上王」を名乗ることができた．一方，ドヴナルの場合，「アルスター王」の称号を与えた年代記もあるものの[12]，「ティローン王（／領主）」と記しているものもあった[13]．ティローンはアルスター地方の中心部を占めるが，その全てではない．

ドヴナルの生涯の数々の戦いにおいて，主な敵は，リチャード・ド・バーグに代表されるイングランド人勢力と，オニール一族のエイド・ブデ直系の親族であった．そして，

ド・バーグとエイド・ブデ・オニールの家系は同盟関係にあった．これらの敵に対抗するために，ドヴナルは，スコットランド王家と同盟することを選んだ．折しも，スコットランドでは，ゲール系の血を引くロバート・ブルースが1306年に王になった．スコットランド王家のロバートとエドワードのブルース兄弟は，ドヴナルにとって，イングランドを共通の敵とする重要な同盟相手であったのだ．

おわりに

エドワード・ブルースによるアイルランド侵攻は，アイルランドに大きな爪痕を残した．ブルース軍らが各地でくり広げた破戒と略奪に加え，ヨーロッパ中が飢饉に襲われた時期とも重なり，食人が行われたとの記録もある[14]．

ドヴナルは，アルスター地方で自身の王としての地位を安定させることを第一に願ったのではないか．そのために彼が「アイルランド上王」に選んだのは，「ゲール同盟」の相手ブルースであった．敵対する親族がイングランド勢力のド・バーグ家と同盟していたように，ドヴナルはスコットランド王家のブルースと同盟を結んだ．

ドヴナルの試みは失敗に終わったが，確かにアイルランドのイングランド勢力に大きな打撃を与えたのであった．

注

1) ブリアン・オニールについては，田中美穂「1258年のブリアン・オニールとオコナー、オブライエンとの同盟」『大分工業高等専門学校紀要』第58号，2021年，1－4頁を参照のこと．
2) Seán Duffy (General editor), *Atlas of Irish History* (Dublin: Gill & Macmillan, 1997) pp. 40-41; Duffy, *The Concise History of Ireland* (Dublin: Gill & Macmillan, 2000; pbk. ed. , 2005), pp. 78-79.
3) ドヴナル・オニールの生涯については，主に以下の研究を参照した．Duffy, 'UA NÉILL, DOMNALL (ANTE 1260-1325)', in Duffy (ed.), *Medieval Ireland: An Encyclopedia* (New York and London: Routledge, 2005), pp. 480-481; Emmett O' Byrne, 'O' NEILL (Ó Néill), Domhnall (d. 1325)', in J. McGuire and J. Quinn (eds.), *Dictionary of Irish Biography: from the earliest times to the year 2002 (under the auspices of the Royal Irish Academy)* (Cambridge: Cambridge University Press, 2009)（以下*DIB*と略す）, vol . 7, pp. 752-753; Katharine Simms, *Gaelic Ulster in the Middle Ages: history, culture and society* (Dublin: Four Courts Press, 2020), pp. 98-118. 本稿で扱う年代記史料は，*Annals of Ulster*, W. M. Hennessy and B. MacCarthy (ed.), 4 vols. (Dublin, 1887-1901), 以下，*AU* と略す．*The Annals of Loch Cé*, W. M. Hennessy (ed.), 2 vols. (London: Rolls Series, 1871), 以下，*ALC* と略す．*Annála Connacht: the Annals of Connacht*, A. M. Freeman (ed.), (Dublin: Dublin Institute for Advanced Studies, 1983). 以下，*AC* と略す．*Annála ríoghachta Éireann: Annals of the kingdom of Ireland by the Four Masters*, J. O'Donovan (ed.), 7 vols.(Dublin, 1851; rep. Dublin: De Burca rare books, 1990), 以下，*AFM* と略す．年代記史料も『抗議書』も下記のサイトで公開．CELT(＝Corps of Electronic Texts): The Online Resource for Irish history, literature and politics. (https://celt.ucc.ie/index.html).
4) *AFM* 1325.1; Simms, *Gaelic Ulster*, p. 115.
5) O' Byrne, 'O' NEILL (Ó Néill), Domhnall (d. 1325)', p. 753.
6) エドワード・ブルースのアイルランド侵攻については，主に以下の研究を参照した． Robin Frame, *Colonial Ireland 1169-1369* (Dublin, 1981; Dublin: Four Courts Press, 2nd ed., 2012), pp. 126-136; S. Duffy, 'The Bruce brothers and the Irish Sea world, 1306-29', *Cambridge Medieval Celtic Studies,* 21(1991), pp. 55-86; rep. in Duffy (ed.), *Robert the Bruce's Irish Wars: the Invention of Ireland 1306-1329* (Stroud, 2002), pp. 45-70; David Beresford, 'BRUCE, Edward (p. 1274-1318)', in *DIB*, vol . 1, pp. 944-945; Simms, *Gaelic Ulster*, pp. 110-115 ; 常見信代「スコットランド独立戦争とアイルランド――その１　ブルースの侵略とプロパガンダ文書――」『エール（アイルランド研究）』第 19 号，1999 年，23－41 頁 ; 常見「ブルースのアイルランド侵略――その目的をめぐって――」『北海学園大学人文論集』第 23－24 号，2003 年，87－120 頁．
7) D. E. R. Watt (general ed.), *Scotichronicon* by Walter Bower (Aberdeen, 1991), vol.6 (Books XI & XII), 384-403 にテクストが収録． Diarmuid Scully, 'The Remonstrance of Irish Princes, 1317', *History Ireland* (Nov. / Dec., 2013), 16-19.
8) Duffy, 'The Bruce brothers', pp. 51-52; 田中美穂「中世アイルランドにおける『ネイション』意識」法政大学比較経済研究所／後藤浩子編『アイルランドの経験――植民・ナショナリズム・国際統合』（法政大学出版局，2009年），21－22頁．
9) ブルース兄弟の母方の祖父とドヴナルの祖父が同じ人物であった可能性も指摘されている． Duffy, 'UA NÉILL, DOMNALL (ANTE 1260-1325)', p. 481.
10) *Scotichronicon*, pp. 386-387, 400-403.
11) Simms, *Gaelic Ulster*, pp. 106, 419-420.
12) *ALC* 1325.1; *AC* 1325.2.
13) *AU* 1322.1; *AFM* 1325.1.
14) *AU* 1315.5; *ALC* 1318.7; *AC* 1318.8.

（2022.9.30受付）